

サカワ村の小学校にも訪れました。昼の授業が13時から始まる為、子供達が集まっていたのですが、時間になっても先生が来ません。先生が教室の鍵を持っているので、生徒は教室にも入れず外で待ちぼうけです。先生を待っている間、日本の子供達が描いた絵をみんなで持って、写真を撮りました。少し待っても来なかったのが、学校を出てサカワ村を車で走っていると先生が悠長に歩いていたのです。今学校に向かっているところらしかたのですが、授業開始時間から既に20分も遅れていたし、子供達は勉強したくてちゃんと時間通り学校に来ているのに、先生が来ないが為に勉強できないなんて、先生は無責任過ぎると思いました。



日本の子供達が描いた絵を持って集合写真

高校へも行きました。建設途中の校舎があり、高山さん曰く、これは日本の個人の方からの寄付によるもので、今までにない校舎にするとの事です。教室の壁はタイルを使用し、電気やコンセント、コンピュータも設置され、先進国に劣らない校舎が出来そうです。僻地の村の学校だから・・・と言われる事のない素晴らしい学校環境で生徒の実力や可能性を伸ばして欲しいと思います。

10. 日本語教室とパソコン・折り紙教室

<日本語教室>

日本語教室には殆ど毎日行きました。初めて日本語教室に行って教室の前で子供達に会った時、子供達の方から「こんにちは。」と笑顔で声をかけてくれたのがとても嬉しかったです。その日の授業では、子供達が私に質問をして私が答えるという形でした。生徒は子供だけでなく大人もいて年の差がありましたが、日本語の勉強がしたいという彼らの心には差がなく、年が違っていても同じ授業をし、みんなでフォローし合いながら授業に取り組んでいました。私の想像以上に難しい質問を投げかけてくれた生徒もいて、驚かされました。授業が終わると笑顔で「さようなら。」と言ってくれました。挨拶がしっかり出来るという事は心が豊かだからこそ出来るのだと思います。



日本語教室の授業風景

ある日の授業で「幸せなら手をたたこう」を日本語で歌ったのですが、カンボジア語でもこの歌があるらしく、子供達も覚えが早くみんなで楽しく手を叩きながら歌いました。それまではあまり笑顔を出さなかった子も、みんなで歌う事で次第と笑顔が出てきて、最後には笑顔で笑ってくれました。



日本語教室のみんなと集合写真

改めて歌の力はすごいなあと思いました。最後に私が民謡を一曲披露すると、独特な唄い方に驚いていましたが、大変喜んでくれました。生徒を代表して「涙そうそう」を歌ってくれた子もいました。

初めは高山さんの授業の見学だけのつもりでしたが、2クラスの内、先生が足りていない時は私が代わりに教える事もありました。日本語教師の資格を持っているとはいえ、教壇に立つ事が殆ど無かったので、緊張しながらではありましたが、生徒の一生懸命取り組む姿を見て私に出来る事を出来るなりにやろうと思い、教壇に立ちました。

この日本語教室の生徒の1人が今年の4月から日本に留学する事が決まりました。高山さんの活動や取り組みや思いを知り、賛同された青森の光星学院高校の校長先生から日本語教室の生徒の中から1人留学生を受け入れたいとの申し出があったのです。これは本当に夢のような素晴らしいお話で、留学する子はもちろんの事、村全体に大きな刺激となったに違いありません。この事から他の子供達も夢が現実になる事、また自分にもチャンスがあるという事を知り、日本語の勉強もですが自分の夢を諦めずに頑張る事の大切さを知ったのではないのでしょうか。

生徒のひたむきに勉強に取り組む姿勢には心を打たれました。これからも一生懸命勉強して自分の可能性を最大限に引き出し、夢を実現させていってほしいです。

<パソコン・折り紙教室>

日曜日の午後、高山さんに予定がない時は宿舎でパソコン教室を行います。殆どが日本語教室に来ている子供でした。私が教える事になり、まずは「あいうえお」の打ち方を教えました。

みんな人差し指では打てていたのですが、次に両手10本の指で打てるように教えました。みんな覚えるのが早く、あっという間に「あいうえお」がキーボードを見ずに両手で打てるようになったのです。本当に驚きました。人数の割にパソコンが2台しかなく待ち時間が長かったのですが、誰一人と練習している子を急かしたりせず、自分の順番が来るまで、他の子の練習を見て待ちました。



子供達の真剣さが伝わってきます

パソコンが終わってから折り紙教室をしました。一枚の紙が形を変えて色んな物になっていく事に大変興味を持ち、一緒になって何時間も折り紙に夢中になっていました。パソコンにしる折り紙にしる子供達の覚えは本当に早く、もっと環境に恵まれていたらもっと優秀な子になるだろうと思いました。それだけ可能性を秘めた子供達です。しかしこの子供達にとっての環境は今の村の環境であり、それが現実です。だからこそこの子供達の可能性を少しでも広げるために、ここでできる精一杯の事をしなければならない！と思った1日でした。

11. 今尾さんの歓迎パーティー・イマオロード

今尾さんは JMAS の顧問でもあり、タサエン村にあるイマオロードの資金を寄付して下さった方でもあります。その今尾さんがタサエン村に来られるという事で、郡を挙げての歓迎パーティーが行われました。郡長を含め、何人かの方が挨拶して下さいましたが、共通して言える事はイマオロードが村人達の生活を変え、今や無くてはならないものであり、みんなで大切に使うていかなくてはならないという事でした。

私も何度もイマオロードは通りましたが、本当に素晴らしい道です。イマオロードは高山さんの指揮の下、日本のやり方で作ったそうです。その隣にはカンボジアの業者が作ったカンボジア式の道路があるのですが、作り方の違いで、2年後の今の状態が全く違っていました。雨季の激しいスコールも何度もあったらうけれど、イマオロードは平らできれいなままでした。それに比べてカンボジア式の道路は凸凹になっていて、その差は一目瞭然です。やはり日本の技術は高いのだと改めて思いました。



カンボジア業者の凸凹道路



日本レベルの丈夫なイマオロード

パーティー中の今尾さんの言葉が心に残りました。「普通の考えからすると、まず教育から徹底して環境の変化に繋がるのだろうけど、道がなくて移動が出来なかつたり学校が無くて勉強出来なかつたりというのがこの村の現状であり、教育がままならない状況である。カンボジアでは教育の前に学校や道、地雷撤去などの環境を整えてあげてから、教育というステップに繋がるのではないか。」この言葉が心に響きました。日本の尺度で考えると、日本はある程度の環境が揃っているからこそ「まず教育」と言えるのだろうけど、それは土台となる環境がある事が当たり前で、ない場合を知らないからそう言えるのであり、カンボジアではその土台となる環境が出来上がっていないから教育に繋がっていかないという事を、今尾さんの言葉から学びました。

12. 焼酎作り



ダムロン焼酎作りの名人！

タサエン村ではダムロンという芋がたくさん穫れます。その芋の殆どはタイに売られるのですが、大型トラックに山積みされたもので1万円くらいにしかならないそうです。そして村の復興の為に付加価値の付いた焼酎を地場産業として売り出していき事になったのです。村人が一生懸命作った芋で焼酎を作り、それが利益につながり村の復興に使われる……。これは本当に意味深い事だと思います。いずれ村人自身で経営する事になれば、支援される側から自立へと変わり、支援する側が変わっていく事も可能なのだと思います。

13. 村の生活・子供たち

<村人の生活・気質>

研修中は毎日朝5時に起きて身支度をし、6時前から朝食をとり、6時半には集合して朝日を見ながら現場に向かいました。カンボジアでは朝日も夕日も本当に綺麗でため息を吐くほどでした。

村人も同じように朝早くから活動しているのですが、村の生活は本当にのんびりしています。村人の殆どが農民であり、2時くらいまでは昼食を挟んで一生懸命に仕事をしています。2時頃が1日の中で気温も高く、外では活動が出来なくなります。夕方までちゃんと働いている人もいるので全ての人ではないし時期にもよりますが、2時以降は、ハンモックに揺られて寝ている人もいれば、昼間からお酒を飲んでいたり、木陰で井戸端会議をしていたり、トランプゲームで少しのお金を賭けて遊んだりして、それぞれの時間をのんびり過ごしています。村の青年達がバレーボールをしている光景もよく目にしました。バレーボールはネットとボールとさえあれば、一度に沢山の人が楽しめるスポーツです。コートなど必要なく、田んぼでも畑でも空き地でも場所さえあれば出来るし、ポールが無くても棒があればネットが張れるのです。大自然の中で子供が牛を引いて歩いていたり、車での走行中は道を横切る牛の集団に足止めされつつもその牛を眺めていたりしました。ゆったりした時間が流れ、本当にのどかでした。



なかなか横切ってくれず、足止め状態



毎朝見る素晴らしい朝日



牛を畑へと連れて行く少年

カンボジア人はB型が多いと聞きましたが、カンボジア人の生活や性格に触れていると納得できます。B型を肯定も否定もする訳ではないのですが、私自身がB型であり、表

に出すか出さないは別にして、良い所悪い所含めて共通する所が多いと感じたからです。それからカンボジア人は怒りません。もともと大らかで温厚な性格であり平和主義なのですが、戦争の影響もあってか争うような事はしないそうです。学校でも先生が生徒を叱ったりしないそうです。テストの時にカンニングしていたとしても怒らないというのです。そして細かい事は気にせず、あったらあったなり無かったら無かったなりという感じで、良い事も悪い事も自然の流れに任せています。日本の感覚では理解が出来ませんが、カンボジアでは自然に任せているから待ち合わせの時間に遅れてもみんな当たり前のようにしています。

< 宿舎での生活 >



宿舎の台所 私の後ろが低い洗い場

宿舎での生活はとても快適でした。それは全て高山さんや高田さんを始めとする JMAS のスタッフの皆さん、ハウスキーパーのワンちゃんや近所の方々のおかげだと思っています。ワンちゃんには毎日栄養たっぷりの美味しいご飯を作ってもらいました。また犬や猫、鶏などがいて、飽きる事のない毎日でした。私は本当に猫が好きで、いつも猫のハナちゃんと遊んだり、癒してもらったりしていました。朝からの活動を終え、宿舎に戻ってきて直ぐに飲む水の美味しさは日本では中々味わえないものでした。

宿舎での生活で日本とは違う、台所やお風呂、トイレ事情について書きたいと思います。カンボジアの台所は洗い場がとても低く、腰を下ろして洗います。高山さん曰く、森に住み、生活をしている延長線だからこういうスタイルで家事を行っているそうです。ガス台や冷蔵庫がどんどん普及してきていますが、まだ薪で火を燃して調理している家庭も少なくありません。お風呂は大きな浴槽のような物に水が張っており、タライで掛け流します。もちろんお湯ではなく水です。トイレは日本の和式トイレのような感じですが、トイレットペーパーなど無く、用を足した後は横に溜めてある水を手ですくい直接洗い、桶で何度か水を汲み流します。このスタイルは今までに何度か経験した事があったので大丈夫だったのですが、ショックだった事がありました。それは犬がトイレの溜め水を飲んでいて所を見てしまった事です。犬が飲んでいてであろう水で洗っていたとは・・・これも動物と人間が共存しているという事なのだと言いに言い聞かせました。今では笑い話です。



宿舎のお風呂とトイレ

宿舎の部屋にはトカゲもコウロギも出てきます。それは私達が今でも森の中に住み、他の生き物たちと共存しているという事です。しかし、都会に住んでいると、そういった大切な事を見落としてしまい、本来いて当たり前の生き物たちを毛嫌っています。多くの人が部屋に何か虫がいたら、すぐに殺そうとしてしまうでしょう。私達人間は他の動物や虫達と同じように自然に生かされているという事を忘れてはいけません。

< 村の子供達 >

村の子供達は本当に無邪気で笑顔いっぱい可愛かったです。私が CMAC の試験見学で学校に行っていた時の事です。空いている時間に子供達と井戸の所で通訳を交えて話をしたり、日本語教室に来ている女の子が頑張って日本語で話してくれたりしました。そうしている内に少しずつ子供が集まってきて、一緒に遊ぶようになった



本当に可愛い子供達



いつも花をくれた女の子

のですが、みんな可愛くてすごく楽しかったです。私が地べたに座っていると腰掛けを持ってきてくれたり、お花を持って来てくれたりと、子供の思いやりを感じました。

電気が通っていない村にも行ったのですが、子供達は本当に元気で笑顔で楽しそうでした。電気のある生活で暮している私から見れば不便な生活のように思いますが、彼らにとっては電気の無い生活は不便などではなく、当たり前なのです。

近所の子供達とも仲良くなりました。最初は照れていたのか中々話してくれなかった子も会う度に花をプレゼントしてくれたり、私といる時はいつも手をつないできてくれたり、最後には頬にキスしてくれた子もいました。子供達の優しさや笑顔にはいつも元気をもらいました。あの無邪気な笑顔を忘れる事はないでしょう。

<コクチョール>

夜あまりに肩こりが酷く、ハウスキーパーのワンちゃんにコクチョールというカンボジアで古くから行われているマッサージをしてもらいました。オイル等を塗り、背中や肩、鎖骨辺りを何か固いもの(コインやボトルのフタ)で内出血するくらいまで擦り、血行を良くするというものです。とっても痛く、色んな所が真っ赤に内出血していましたが、とても気持ち良かったです。ただ、皮膚には負担が大きいように思います。

14. 村のイベント・行事

<結婚式>

* 結婚式の流れ *

タサエン村での研修中、4件の結婚式に行く機会がありました。結婚式の披露宴はテントが張られた野外で行われます。新郎新婦が会場の入り口で出迎えてくれ、すぐ後ろにお手伝いの人が出て、小さなキーホルダーやボールペンなどの小物を渡してくれます。日本でいう引出物のようなものです。テーブルに案内されますが、特に席は決まっておらず空いた席に座ります。10人くらいのテーブルで、大体人数が揃ったら料理が出てくるといった流れです。食器(お碗・グラス・箸)は埃らないようにビニール袋にひとまとめになって入っています。



未来のダンサー ビニールに入った食器

食事中、新郎新婦がお客さんに挨拶をする為に何度か会場を回ります。日が暮れだした頃から、ある程度食事が落ち着いた人は音楽に合わせて円になって踊ります。昔ながらの音楽と、若者の間で流行っている激しい音楽が交互に流れていました。私も一緒に踊る事になったのですが、カンボジアの人は何時間でもとても楽しそうに踊ります。宴も終盤に差し掛かった頃、少し端の方で小さな子供達が音楽に合わせて、大人顔負けの踊りで楽しんでいました。私も子供達の側に行って一緒に踊ったのですが、最初は照れ臭そうにしていた子も、時間と共に笑顔で一緒に踊ってくれました。



結婚の神聖な儀式

カンボジアの結婚式は行きたい時に行って、帰りたい時に帰るというフリースタイルです。そして帰る時に出入り口にある箱の中に御祝儀を入れて帰ります。日本では最初に受付があってその時に御祝儀を渡しますが、私もその習慣が根付いていたので、帰り際に渡さないといけないのに車を走らせてから渡し忘れていた事に気付き、高山さんから「食い逃げしたな〜？」と笑われました。結婚の儀式にも参加するなど素晴らしい経験をさせて頂きました。

カンボジアの結婚事情

昔の日本のようにお見合いがまだ多く、カンボジアでは結婚すると「嫁入り」ではなく「婿入り」をします。1件目の新郎は再婚だったのですが、カンボジアでは頻繁にあるそうです。例えば旦那さんと死別したとしても、半年後には再婚という事もあります。死別に限らず、何か問題があって別れてすぐ再婚という事になっても、村の人達はそんな事お構いなく笑顔で祝福してくれるそうです。カンボジア人はとても大らかなのです。

結婚式とごみ問題

カンボジアの結婚パーティーに参加して驚いたのがごみ問題です。テーブルの下にはかなりの量のゴミや空き缶が捨てられます。結婚式には呼ばれてないであろう子供達が捨てられた缶をせっせと集めます。缶は業者が買い取ってくれる為、貧困層の子供達が我先にと集めているのです。この時ばかりはお祝いの場なので大人も怒ったりしません。

食器を出す時に、高山さんがビニールをテーブルの下に捨てているのを目にしました。ゴミゼロ運動を先だっている高山さんのその行動は、カンボジアに行って間もない私にはとても衝撃的でした。高山さんは次の日には業者が来て綺麗に掃除するからと言っていましたが、いくら業者が掃除するからといって先導する立場の人がそういう事をするべきではないと思いました。私はゴミを捨てる事に抵抗があったので、全てバッグの中に入れて持ち帰りました。高山さんからタサエン村のゴミ拾いの指導者として村人に紹介されてきましたが、高山さんがゴミを捨てたのを見て、そんな高山さんの下でゴミ拾いの指導なんて出来ない、そんな感情を抱きながらの結婚式でした。



結婚式が終わる頃には溢れんばかりのゴミ

帰宅後、高山さんがゴミを捨てた事がどうしても心に残っていて、このまま違和感を持ったまま一緒に行動は出来ないと思い、思い切って自分の感じた事を伝えました。高山さんは自分の行動を見て私が嫌な気持ちになる事は分かっていたそうです。

今のカンボジアはゴミをゴミ箱に捨てる習慣はありません。結婚式では次の日に業者が掃除をしますが、業者に披露宴会場にゴミ箱を設置するとか、宴の前や途中でゴミを捨てないように呼びかけをすとか、業者にいろいろ指導して少しずつ変化が出るようにという将来的なビジョン・信念があってこそその行動なのだそうです。高山さんも何も考えずにゴミを捨てている訳ではなく、正直言うと辛いのですが、ここはカンボジアであって日本ではなく、長年カンボジアにいてカンボジア人の性質を知ってカンボジアの尺度に合わせると同時に、自分の中の信念を固く持っているからこそその行動だといいます。高山さんは私に対しても、日本の尺度を1回払いのけて物事を捉えないといけない、今回のゴミの件でも私の考えは綺麗事であると言いました。大切なのは、現実を受け入れる事、信念を持つ事、どうしたらいいかを自分で考え実行に移し、結果を出す事、と教えて下さいました。

その時はカンボジアに来たばかりで、正直カンボジアの生活には慣れてないし、カンボジア人がどういう考え方をしているのかも分からないし、高山さんの言っている意味も全ては理解できておらず、そこから少しずつカンボジアを知っていく事で、もっと色々な事を体感し、自分の中に受け入れていく事が出来るのだらうと思いました。

今でも理解しがたい部分はありますが、それはまだ日本人としての尺度で見ているという事でしょう。今回の研修期間は、カンボジア人のゴミ問題に対する考えや行動を理解するにはあまりにも短すぎであり、時間をかけて村人と過ごしてきた高山さんだから出せた答えがそこにはあるのだと思いました。

<中国正月>



中国正月の豪華な手料理

この日は朝から物凄い音で目が覚めました。中国正月で5時前から爆竹を鳴らしていたのです。中国のお正月はその次の日だったのですが、日本でいう大晦日の日からお祝いをするそうです。中国人でなくても「今日は中国人」とか言ってみんなで祝いするところがカンボジア人らしいところです。私は今回の研修で初めて知ったのですが、この村を含め、カンボジアではおじいさんやお父さんが中国人というような家庭が多く、沢山の人がその血を受け継いでいるのです。中国仏教も日本の神棚に似たようなものを置くのですが、それがあつた家を何度も見たし、実際に宿舎にもあり大家さんがお線香を上げに来てくれていました。

高山さんのドライバーの家でもお祝いをするとの事で、食事に招いてもらいました。中国正月ではアヒルや鶏料理が多らしく、沢山の料理でもてなしてもらいました。北京ダック以外にアヒルを食べた事がなかったのですが、今回はアヒルの足(水かきの部分)も食べました。最初は見た目が生々しかったのですが、食べてみると美味しかったです。

夜は日本語教室のある生徒のお宅でお祝いしました。まずオープニングセレモニーとして高山さんが爆竹に火を付けたのですが、あまりの爆音に驚きました。カラオケもあり、ダンスもあり、料理もお酒もあり……。いっぱい飲んでいっぱい踊って、本当に楽しかったです。子供から大人までみんな本当によく踊るのですが、今回に限らず、踊り疲れてちょっと休憩しようと席に着こうものなら、村人にすぐにまた引っ張っていかれ踊るといふ事もしばしばでした。



大人顔負けのダンスを披露する子供達

<新築祝い>

タサエン村に到着した日に新築祝いに行きました。私達が行った時はみんな食事をしたりお酒を飲んだりとても賑やかでした。カンボジアも日本と同じで新築の時はお祓いをします。びっくりしたのが、車を買って替えた時にもお祝いをする事もあり、事故を起こさないようにという意味を込めてみんなで祝いするそうです。これは流石に日本にはないなと思いました。しかしこういう事から人と人とのつながりもより深いものになっていくのだと思います。

この村人達は私が村に来たばかりで、初対面という事も関係なく話しかけてきてくれたり、何度も何度も乾杯をしてくれたり、受け入れて下さっているという気持ちが伝わってきて、とても嬉しかったです。この日は村に来たばかりで緊張して固まっていたし、クメール語で話しかけられても何を言っているのかさっぱり理解が出来なかったのですが、笑顔で一生懸命に話しかけてくれる事が嬉しくて、私も自然と笑顔になっていました。ここに住んでいる人達はとても温かなあと感じました。

<お盆だと思っていたお葬式>

ある日、お寺に人が集まっていたので用事を済ませた後、立ち寄る事にしました。その日朝5時から音楽が流れていたのですが、そこで初めて朝の音楽が何だったのかが分かりました。高山さん曰くお盆だそうです。日本のお盆やお彼岸なのですが、月に2回くらいあるそうです。お盆の時にお寺に行く時間帯は特に決まっておらず、お賽銭をして先祖を悔やみ、おかゆを頂く、そんな感じだそうです。宿舎に帰って別の人が、「〇〇さんのお葬式には行きましたか？」と聞かれました。お盆に行っていたつもりが、実はお葬式に行っていたのです。どここの誰々さんが亡くなった等の情報が回って来ず、その場で分かたり、後で分かたりする事が多いのだそうです。

15. 食文化

カンボジアを始め東南アジアの食文化はとても興味深いものがあります。カンボジアの料理は基本的に何でも美味しいです。タイやマレーシアなどの他の東南アジアの国々の料理に比べて辛くなく、日本の料理に近い味付けで、いつも食べ過ぎてしまいました。食事は各自大きめの平皿に大目にご飯を盛り、中央に置かれたおかずやスープをスプーンで少しずつ取って食べるというスタイルです。カンボジアでは少ないおかずを沢山のごはんで食べるという文化があります。

まだ熟していない青味がかかったマンゴーに塩を付けて食べるという、日本では見慣れない食べ方もあります。熟したマンゴーとは違い、さっぱり美味しく頂けます。マンゴーなどの美味しい果物だけでなく、村人は木になる実は苦くても酸っぱくても食べられる物は何でも食べていました。

ある日、ヤシの実にまつわる話を聞かせて頂きました。カンボジアでは客人が来る時にヤシの実(ジュース)を出す事は「最高のもてなし」なのだそうです。今でこそ井戸や水道から水を出す事が出来ますが、昔はきれいな水が無く、ヤシの実の中の水分はとても貴重だったのです。南国ではヤシの木はどこにでもあるイメージで日常的な飲み物だと思っていたのですが、それは大きな間違いであり、とても貴重なものだったのです。

ある日、食事中にスイカが出てきたのですが、半分に割ったスイカをスプーンですくってご飯と一緒に食べるというスタイルでした。ここではスイカはデザートではなく、おかずだという事にも驚きました。



孵化する前のアヒルの卵

あるお店でアヒルの卵を食べました。ただのゆで卵ではなく、ふ化する前の卵を蒸したものです。味は美味しかったのですが、殻の中はヒナの形そのままだし、羽もしっかり生えていて本当に生々しく、卵1個食べるのに1時間くらいかかってしまいました。

ある日、高山さんがコウロギの炒め物を持って帰ってきました。中にはセミやバッタ、カナブンも入っていたのですが、高田さんは手を止めることなく美味しそうに食べていました。私は食べないつもりだったのですが小さめのコウロギを選んでひとつだけ食べました。味や食感は意外と良く経験としては食べられますが、いつもは食べられないなという感じです。

肉や魚は、電気の通っていない村もあり、冷蔵庫が無く冷蔵保存が出来ない家庭が多い為、近くの市場に買いに行ったり、魚屋さんがバイクで売りに来たりします。そこではタイから入って来た海で獲れた魚や近くの川で獲れたものなど新鮮な物が手に入ります。飼っている鶏や牛を庭でさばく事もあります。実際には見てないのですが、私が参加していた結婚式で料理が足りなくなり、料理担当の人が、庭を走っていた鶏を捕まえ、足を掴んで岩にぶつけて気絶させ調理していたそうです。これは昔の日本でもあった光景だと思います。



肉の切り身は生のまま直接販売

村人はその他にも本当に色んな物を食べます。何でも食べます。木の実や野草はかわいいもので、ヘビやカエル、野ネズミ、コオロギやバッタ等の昆虫、アリも食べるのです。本当に森の民です。これは聞いた話なのですが、高山さんが地雷原に行く途中にあるお宅の方がご飯を食べていた時、いつもいるはずの犬が見当たらなかつたらしく聞いてみると、その犬が飼い主の手を噛んだので殺して調理して食べたというのです。これはさすがに日本ではない事だと思いましたが、カンボジアでは地域によっては犬を食べる所もあり、そういう現実もあるのだと知りました。戦争中は食べる物がなく、ジャングルの中にいたゾウを捕まえて食べたと言う実体験を聞かせて頂いたこともありました。

16. その他

<環境が影響する自分の欲>

プロイ・ヴィッチャイさんのお宅に伺った時の事です。彼は現在ポイペトからプノンペンまでの鉄道工事関係の仕事をしていますが、2006年までMAG(UK)で地雷のコーディネーターをしていたそうです。彼はポルポト時代にタイの難民キャンプで過ごしていました。その時にテントの外から英語のクラスを覗いて必死に勉強していたそうです。環境が悪ければ悪いほど自分の欲が満たされそうな時は必死で頑張りますが、逆に環境が満たされ過ぎると選択肢が多過ぎて何も出来なくなるという事を、ヴィッチャイさんの難民キャンプの実体験を交えて聞かせて頂きました。日本では殆どの方が組織に守られて生きている、だから定年したら何をしたらいいかわからず何も出来ない人が多いのだと高山さんも言っていました。

<武器>

戦後のカンボジアは銃などの武器が沢山あり、普通の民家にも置かれていて、少し前まで沢山の人が銃を持っていたそうです。カンボジアでは100ドルくらいで買えるらしいのですが、今でも隠し持っている人が多いそうです。武器を無くす為に武器と自転車や井戸などを交換してきた事もあったそうですが、それでもやはり無くならないそうです。武器の一部だけ出し全ては出さない人が多かったのです。数十年前まで戦争があった訳ですから、今もなお武器を持つ人がいるのはある意味仕方ないのかもしれませんが、早く武器の無い平和な生活になったらいいと思います。

<木から学ぶ>

オートロチェツェ村の村長さんのお宅に伺った時の事です。大きな木で造られたテーブルがありました。これは大変価値のある木らしいのですが、昔、ポルポト軍が殆どの木を切り、政府側に見つからないようにタイに密輸して武器を買っていたそうです。その為、今はこの木は殆どないそうです。木ひとつ取ってみても、戦争が絡んでくるのだなと思いました。それが意味するのは、その時代はお金に変えられる物は全て武器に値するという事であり、それだけ戦争が人々や人々の生活や環境、自然に影響を与えているという事なのです。

そして木は生活に欠かせないものです。殆どの家庭が木造の家に住み、暑ければ木陰で休みます。木になる実は大切な食糧です。この村では木で造られた橋がまだ多く、単に丸太を並べただけの橋もあります。橋の丸太何本かが折れていて車で渡れず、目的地まで歩いて行った事もありました。村の生活には木は無くてはならないものであり、木の大切さを改めて考えさせられました。



1本でも折れると大変な事に！

<素敵な贈り物>



心のこもった素敵な贈り物

JMAS プノンペン支部の佐藤さんがタサエン村に来られた時に、段ボールの箱を持って来ていたのですが、その中には愛媛銀行の職員の方が集めて下さった鉛筆やボールペンが沢山入っていました。鉛筆は使いかけもので芯が全てキレイに削ってありました。新しい鉛筆ではなく、使いかけの鉛筆だから意味があるのだと思います。「何で新しいのではなく使いかけなんだ！」と思う方もいるかもしれませんが、日本で新しい物を買って送るのであれば、現金を渡してカンボジアで買った方が何倍も安く沢山買えます。しかし、使いかけだからこそ、その鉛筆を通して持ち主からカンボジアの子供達へ受け継がれていく何かがあるのではないのでしょうか。その気持ちが大切なのだと思います。そこに温かみを感じるのです。そして全ての鉛筆を

キレイに削ってから送って下さった事にも意味があります。もらう側に削る手間をかけさせないように、少しでも長く書く事が出来るようにと、相手を思いやる気持ちがそこに感じられました。ダンボールを空けた瞬間、とても温かい気持ちになりました。

それから愛媛の子供達がカンボジアの子供達にと沢山の絵を描いてくれました。どの絵も本当に素晴らしく、日本や愛媛を紹介したものや、日本とカンボジアの国旗、日本とカンボジアの子供達など、様々な絵がありました。日本の子供達がカンボジアの子供達の事を思って一生懸命心を込めて描いた事を思うと胸がいっぱいになりました。またその絵や鉛筆、ボールペンなどを渡した時、村の子供達も本当に喜んでくれて、自分の手でその橋渡しが出来た事を嬉しく思いました。



日本の子供の絵に喜ぶ子供達

<言葉の壁>

今回の研修で大変だったのは、言葉の壁です。通訳がいる時はいいのですが、通訳無しで村の人と接している時は全くといっていい程言葉が分かりませんでした。日本語も英語も通じない。カンボジア語の本を持って行きましたが、発音が難しく、伝わっていない場合が多かったです。普段は高山さんや通訳と一緒にだったので、少くく通じなくても何とかあったのですが、1人でホームステイやゴミ拾いに行った時は、何度も言葉の壁に突き当たりました。

あいさつさえろくに出来なかった私ですが、研修も終わりに差し掛かる頃には片言ではありますがコミュニケーションが取れるようになっていました。現地の言葉が話せるというのは、現地にいる時間が長い短いではなく、どれだけ自分が相手を理解したい気持ちがあるか、どれだけ自分の気持ちを伝えたいかという事であり、そうする事で言葉の壁を壁と感じなくなり意思相通が出来ていくのだと改めて感じました。しかし次に行く機会があれば、事前にもっと勉強しておきたいです。

17. 支援のあり方と国際理解

支援とはする方にもされる方にも責任があると高山さんはいつも言っていました。私の滞在中で強くそれを感じたのは、やはり井戸とゴミ問題に関してでした。

使えなくなりそのままになった井戸を見る度に胸が痛くなりました。支援される側は、どういう気持ちでみなさんが井戸を寄付して下さったか考えるべきだし、与えられるだけでなく自分達で維持し継続して使っていく責任があります。そうする事で管理や経営など第三者に頼っていた事を自分達でするようになり、自らの自立にも繋がっていくのだと思います。そして支援する側は、寄付をすれば良いというのではなく、現地でどの様に活用されているのか、また現在どういう状況なのか知るべきだと思います。ただ寄付をして満足しているようではただの自己満足にしか過ぎません。現地の人達の事を思う気持ちと理解する気持ちが大切なのです。

ゴミ問題に関しては、私は何度かかなり感情的になってしまいました。ゴミ拾いの最中、私は真剣に取り組んでいるのに村人達は相手にしてくれなかったり、そのまま遊んでいたりで。感情的に声を張り上げたりするのはあまり得意な方ではないのですが、村人達の反応に対して感情的になって自分をさらけ出して接すると、村人達が動いてくれたのです。支援とは単に与えるだけでは駄目なのです。相手に嫌われない様に優しく遠まわしに言っても何も伝わりません。自分の頭からつま先までの全身を使って本音で相手に接する事でその思いが相手に伝わり、相手との信頼関係が出来、自分達も変わらなければという気持ちの変化に繋がっていくのだと思います。支援とは心のつながりだと思います。言い換えれば、心のつながりがあってこそ支援は成り立っていくものなのだと思います。その支援によって現地の人達が自覚し、習性化し、生活が変わり、文化が変わっていく事で初めて「いい支援だった。」と言えるのかもしれない。

今回の研修では支援とは金銭的なものだけではなく、相手の為に何が出来るのかを考え行動に移す事が支援になるのだと改めて感じました。それには相手の国や文化、習性などへの理解も必要となってきます。日本の常識で物事を判断するのではなく、相手の立場になって物事を考える事も大切になってきます。自分の尺度を払いのけ、相手を理解しようとする事が国際理解へと繋がり、その上で支援へと繋がっていくのかもしれませんが、国境という境界線があっても文化や言葉が違っていても、同じ人間です。分かり合えないはずはないし、そんな隔てはどうにだってなります。育った環境が違うだけで、同じ人間であり、結局は人と人、個人と個人の繋がりなのです。

相手に対して何かしたい時、時間にもお金にも余裕のある人は現地に行って活動を、時間は無いけれどお金のある人は寄付を、時間もお金も無い人は相手の事を考え思いやり周りの人に呼びかけて現地の事を伝えたりする、それでいいと思います。相手の事を思い今の自分に出来る事を一生懸命やる事がその人にとっての支援なのだと思います。

18. 高山さんの言葉

高山さんからは本当に沢山の事を教えて頂きました。特によく言って頂いたのが次の言葉です。

- ・大切なのは、現実を受け入れる事。
- ・信念を持つ事。
- ・どうしたらいいかを自分で考え実行に移し、結果を出す事。
- ・目的に対してどうなのか。
- ・自分の責任逃れをやっていては結果が出ない。
- ・自分で決めずに決められた事ばかりするのは、自分が責任を負いたくなく自分を守っているだけである。
- ・本質を見極める力を付ける事。それが出来ないと、手段にばかり気や時間を使うことになり、とても無駄である。
- ・迷っている間は信念がない。
- ・大きな事を成し遂げる為にはやっぱり人。その人を集められるかどうかはその人次第である。

<現場には真実がある>

「現場には真実があり、現場から考えると物事の本質がよく見える。現場で実行しながら考え、考えながら実行する事で本質からずれない行動や考え方が出来る。現場は常に変化している生き物であり、現場に合っていない支援では意味がない。それから、地雷処理は地域復興の一部であり、地雷処理だけをしていては駄目。平和構築は今産声を上げている。これからどんどん進んでいくだろう。」と高山さんは教えて下さいました。

高山さんからは研修中に関してだけでなく、生きる上で大切な沢山の事を教えて頂きました。研修後日本に帰ってからは研修前とは違った視点から物事を見る事が出来るようになった気がします。

19. おわりに

今回の研修で何度も考えさせられたのは「本当の幸せとは何なのか」という事でした。戦争が無く、それなりの生活環境が整っていて、1日3食のご飯を食べる事が出来、家族や周りの人が笑顔でいてくれたらそれ以上の幸せはないのだと感じました。日本の尺度から考えると生活するには不便な村かもしれませんが、村人は皆口を揃えて「幸せです。」と言います。戦争を知らない私ではありますが、その言葉には本当に深い意味が込められているのだと思います。

それから「自分にとっての環境」という事を考える機会がよくありました。何不自由のない恵まれた

環境、情報や選択肢が溢れている環境、戦争という環境、地雷と共存しているという環境・・・、それぞれがそこで暮らす人の環境でありそれが現実なのです。生まれてくる子供達は親や場所を選ぶ事が出来ません。その環境の中でどう生きていくか、そこに生きる意味を見出していけるかどうかは自分次第なのです。

今回の研修は自分の想像を遥かに超えた素晴らしい研修となりました。これも全て私を支えて下さった皆さんのおかげです。本当に感謝しています。高山さんには毎日色々な経験させて頂き、本当に沢山の事を教えて頂きました。時には冗談を言って笑わせて下さり、時には親のように本気で叱って下さいました。そして自分ひとりで考え行動する機会も与えて頂き、自分の弱い部分と向き合いながら自分の成長に繋げていく事が出来たと思います。

私はもともと東南アジアが大好きだったのですが、今回の研修でカンボジアが大好きになりました。今回の研修をきっかけにカンボジアについてより理解を深めていくと共に国際的視野を広げ、ここでは書き切れなかった事も含め今回私が得た事を沢山の人の人に知ってもらい、国際理解へと繋がっていくように伝えていきたいです。



笑顔は幸せの証！